

Title	十七・八世紀に於ける和蘭経済学説 (其一)
Sub Title	
Author	藤田, 徳三
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.4 (1914. 5) ,p.391(11)- 416(36)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140501-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の購買組合とを區別して數字を掲げず又之を區別するに努めざるの風あるは余輩の太だ感服せざる所なり、こは餘論として暫く度外視し本邦に於る消費組合の現状は漸く中流者の間に成立の端緒を告げたるに過ず眞の發達は之を尙ほ將來に期せざるべからず然りと雖將來に於て勞働者の間に消費組合の成立し生長するの時に及び産業組合の名稱に執著して強て他の組合と歩調を一にし行動を共にせんとするが如きことあらば獨逸に於るが如く亦分裂も起るべく無用の事論衝突も免かれざるべし是れ余の今より豫言して敢て憚らざる所、吾人宜しく此點に留意して無益の論争精力の費消を避るに努めざるべからざるなり

十七・十八兩世紀に於ける和蘭經濟學說 (其一)

福田 徳三

小引

本文の敘述に入るに先ち予が試みに作れる次の蘭・英・日對照經濟學年表を一見せられんことを乞ふ。此表は極めて杜撰なるものなれども予が兼てより作成を志しつゝある東洋經濟學比較年表の第一著手にして漸次に伊、佛、西、獨竝に支那を之に書加へて東洋と西洋と又た歐洲の國と國との間に於て我が經濟學が如何なる發達を經來りしかを一目の下に綜覽せしめんと欲するものなり。和蘭のウセリックス、グロイチウス、英吉利のトーマス・マン我が本佐錄の著者(本多正信又は藤原惺窩)とが粗時代を同じくして共に十七世紀經濟學の劈頭に立つこと、和蘭のドラクール、英吉利のカルベラー、我邦の熊澤蕃山の何れも「コムテムボラリ」なること、英のダヴナンと我新井白石と蘭のル・モアンド・ド・レスピンリ、カールド、ル・ロンと我太宰春臺と共に同時期に屬すること、蘭のルツツク、ベステルと英のアダム・スミスと我三浦梅園、竝井上四明從來誤て土井濤とと同時に生れたること、英のマルサスと我佐藤信淵とが僅かに若干年を隔て、生れたること、英のリカルドと我佐藤一齋最博士の祖父に當れりと聞きたることあり若し事實なりとすれば我邦學者中と同年に生れたること等は何れも最極端な否リカリアンたりし田口博士の因縁する所漢からずと云ふ可しと同年に生れたること等は何れも多少の興味ある事實ならずや。

		W. Temple	1628-1700	中村 協齋	1629生
		Josiah Child	1630-1699	貝原 益軒	1630生
B. Spinoza	1632-1677	John Locke	1632-1704		
U. Huber	1636-1694				
J. Voetius	1647-1714	I. Newton	1643生		
G. Noodt	1647-1725				
		Gregory King	1648-1712	西川求林齋	1648-1724
A. Wyngaerden	(1674)			淺見 絢齋	1652生
		Charles Davenant	1656-1714		
				新井白石	1657生
				陶山 鋪翁	1657-1732
				室 鳩 巢	1658生
		Dudley North	(1691)	荻生 徂徠	1666生
		John Asgill	(1696)	陰山 元質	1669-1732
				三輪 希賢	1669生
C. V. Bynkershoek	1673-1743				
Le Moine de l'Espine	(1715)				
Ricard	(1722)			太宰 春臺	1680生
Le Long	(1729)	Josua Gee	(1730)	(經濟錄)	1729
Imhoff	(1741)	Vanderlint	(1734)	山縣 周南	1687生
D. Tulleken	(1741)	Berkeley	(1735)	岡 白 駒	1692生
D. V. Goens	(1743)	M. Decker	(1744)	五井 蘭洲	1697生
J. Emants	(1754)	J. Tucker	(1750)	青木 昆陽	1698生
C. H. Bihon	(1766)				
J. Briustens	(1770)			(建部清庵 民間雜書 1760 和蘭答問書 1770)	1710生
H. C. Cras	(1771)			宇佐美 鷺水	
v. Wassenacr	(1773)	David Hume	1711生		
Poelmann	(1782)	James Steuart	1712-1780		
v. d. Pot	(1782)				
v. d. Graaff	(1785)				
E. Luzac	1723-1803	Adam Smith	1723生	正司 考祺	(經濟問答 秘錄1774)
F. W. Pestel	1724-1803			三浦 梅園	(1723生 假原1775)
				井上 四明	1723生

十七、十八兩世紀 蘭、英、日、對照經濟學年表

和 蘭		英 吉 利		日 本	
學者名	時代	學者名	時代	學者名	時代
		Thomas More	1478-1535		
		Hugh Latymer	1472-1555		
		Wm. Stafford	(1581)		
		Walter Raleigh	1552-1618		
		F. Bacon	1560-1626		
和蘭東印度會社の設立	1602			家康征夷大將軍となる	1603
		英國東印度會社株式會社となる	1613		
				本多正信 (藤原惺高)	本佐錄 1596-1614
W. Wsselinck	1566-1647(?)	Thomas Mun	1571-1641		
Hugo Grotius	1583-1645	(Englands treasure by foreign trade	1623		
Mare liberum	1609				
De jure belli ac pacis	1625				
Inleiding tot de hollandsche Regts geleerdheyt	1631				
A. Vinnius	1588-1657	Thomas Hobbes	1588-1679		
Dirck Graswinckel	1600-1668				
M. Z. Boxhorn	1612-1653	J. Harrington	1611-1677		
P. de la Court	1618-1635	Thomas Culperer	(1623)	山崎闇齋	1618生
		Wm. Petty	1623-1687	熊澤蕃山	1619生

v. d. Oudermeulen	(1785)	T. R. Malthus David Ricardo	1766生 1772生	荏戸太華 (1751)
				細井平洲 1728生
				本居宣長 1730-1801
				中井竹山 1730生
				中井履軒 1732生
				畑中太沖 (1751)
				龜井道載 1743生
				木多利明 1744-1821
				草圖直方 (三貨圖彙) 始稿1793
				古賀精里 1750生
				龜田鶴齋 1752-1826
				海保青陵 1755-1817
				松平定信 1758-1829
				植崎九八郎 (1787)
				佐藤信淵 1769生
				佐藤一齋 1772生
				藤田一生 1774生
				帆足萬里 1778生
				東條一堂 1778生
				朝川善庵 1781生
				廣瀬淡窓 1782生
				新宮涼庭 1786生
				藤森弘庵 1799生

備考

一日本經濟論者は瀧本誠一君編纂の日本經濟叢書に收録するものに付て其注意に値するものを摘出す。
 一英吉利學者はロツシアー氏英國經濟學史に敘する所に更に十八世紀の學者を添へたり。
 一和蘭學者はラスバイレス氏共和時代和蘭經濟思想史に敘する所に就て其重要なるものを摘出す。
 一括弧中の數字は其主要著作の編述若くは刊行年を示す。
 一人名の下に横線を引くものは經濟論者として殊に重要な學者たるを示す。

(一)

經濟學の黄金時代は千七百五十二年より千八百二十三年に至る約七十年間の英國に在り。換言すればデヰキツド・ヒュームの Political Discourses 初めて世に出でたる年よりデヰキツド・リカルドの歿年に至る間こそ我經濟學がまさに成人の域に達したる時代にして之を後の黄金時代白銀時代とするを勝れりとすたる十九世紀の最後二三十年間に比すれば彼此相隔つる甚だ著し。千七百五十二年とは我寶曆二年に當り經濟錄の書を以て著聞する太宰春臺の歿後僅かに五年、而して實に春臺の Discourses たる紫芝園稿刻成の年に方れり。千八百二十三年我文政五年は我邦に於ては所謂文化文政の學問振興の時代に屬し、我等が親しく其人を見るを得たる碩儒根本通明、重野安繹先生等の生時にしてアダム・スミスの生年とまさに百年を隔てり。予が先づ此一事を記憶に喚起せんと欲するものは歐洲に於ても經濟學の成長は極めて新いきものなるを明かにせんが爲めなり。這箇黄金時代以前に於ける西洋の經濟學は未だ學問としての體系を整へたるものにあらず。伊太利を除くの外は歐洲何れの國に往くも經濟學説は多く諸種の雜著中に散見するに止り、一科の専門學とし

て之れを見るときは極めて幼稚なる状態にあり、春臺の經濟錄の經濟論として甚だ雜白なるを非難する遠ある人は須く去て歐洲の學者に付て其論說の體裁如何を吟味し見よ、必ずしも我邦を貶して彼歐洲を揚ぐるの安全ならざるを悟る可きなり、元より此黃金時代以前伊太利に於て佛蘭西に於て又英國に於て其見識の卓越せる經濟說を發見することは比々として之れありと雖も、伊太利に於ける貨幣論、佛國に於ける租稅論、英國に於ける海外通商論等何れも皆時勢の產物にあらざるはなし、然らば其時勢の存せざりし我邦に於て之と比肩す可き學說の產出せられざりしことは敢て怪むに足ることなきなり、同じ時勢の存せざりし獨逸に此等と對照し得可き學說の起らざりしことは其有力なる證左ならずや、他の學問は措て問はず、經濟學の上に就て見るときは、我邦の歐洲に比して、缺く所のものは千七百五十二年より千八百二十三年に至る英國經濟學の黃金時代是れのみ、慶應明治年初の間に於て或はイリスの重譯或はウエーランドの翻譯前者は神田孝平氏の譯、後者は小幡篤次郎氏の譯を得て始めて、恐ら西洋經濟學の新智識に接し額に手して之を歡迎したる我邦は、這箇七十年を闕くによりて恰かも深夜の夢を破られたる感ありしな

る可しと雖も、若し千七百五十二年以前に於て、即ち我等が祖徠の政談、春臺の經濟錄千七百二十年を有したる時に於て、長崎出島に來舶せる和蘭東印度會社の船が和蘭經濟書の一冊を齎らし來れることありとせんか、彼一蘭藩の儒醫にして民建部清庵が杉田玄白に書を發して阿蘭陀人年々日本へ來るに外科と云は見ゆれども内科と云は見えず、阿蘭陀には内科の醫者はなきことなりや、中略日本にて阿蘭陀流と稱する者、皆膏藥油藥の類ばかりにて腫物一と通りの療治のみする事不審なり、等四箇の問を以て疑を質し、玄白の周到細密なる返書を得て、三十年來同業之人に每會及此論候得共、蠱啞之類計にて不及是非之沙汰、切齒搔痒罷在候處、天良縁を假し幸逢伯樂之一顧、冀北老馬躩躑長鳴之時を得候事、誠千載之一奇遇と奉存候、中略此御盛舉にて正眞和蘭流外科の一家立、本尊有り、宗旨あり、先生は即開關唱道之祖師也、和蘭醫學問答卷下文明源流叢書第二卷第三百九十七頁と驚愕感歎したるが如きものあらざりしなる可し、何となれば千七百五十年代に於て和蘭の有したる經濟學說なるものは Hugo Grotius, Dirck Graswinckel, Marcus Zuerius Boxhorn, Benedictus Spinoza, Arnold, Voerius, Gerhard Noodt, Johannes Voetius, Cornelius van Bynkershoek, Ulrich Huber 等の國際法學者、政治論

者の著書中に散見する若干の經濟學說の外は唯だ W. Visselincx, Pieter de la Court (Van der Hoeve) の書の見る可きあるのみなればなり。翻て我邦を見れば此時既に山崎闇齋問答あり熊澤蕃山大學或問集あり中村惕齋あり貝原益軒あり西川求林考華夷通商あり淺見絢齋あり新井白石建議中に本朝貨物通用事略等あり折あり陶山鈍翁對馬の學者にして經濟上の論著甚あり室鳩巢上言錄又兼山秘策不亡抄あり荻生徂徠との説ある由なれども徂徠答問書鈐錄辨名辨道を著はすあり蔭山元質田録ありヒュームに長ずる一年なる宇佐美潛水社倉考輔儲談事務あり而して正司考祺の大作經濟問答祕録千七百七十四年三浦梅園の價原千七百七十五年井上四明の經濟十二論等何れも僅かに二三十年の後に在るなり。草茅危言を以て著聞し別に經濟要語此他に錄なる著ありと云ふものあり未だ見ざれば眞偽を知らずの著ある中村竹山は時に二十餘歳の青年にして富國雜義の著者龜田鵬齋は實に此の千七百五十二年を以て生れ吾人が殊に見識の高く獨創の見に富めるに敬服する海保青陵鶴は之に後る、三年にして生れたり。今此等の日本學者の説を取りて之をウセリングス、グロッチュス以下の和蘭學者の經濟說と比較對照するときは、我邦の學問和蘭に比して著しく劣れりとなすもの恐

らく一人も之れあらざる可し。唯だ不幸にして我邦にヒュームなくアダム・スミスなきのみ。右に列舉せる十餘の和蘭學者中其經濟學の就て見る可きもの獨りウセリングスとド・ラクル蘭譯してフアンデル・ホーフエとも稱すあるのみ。而して學問的經濟論者として唯一なるド・ラクルは千六百十八年に生れ千六百八十五年に死す、即ち生年を山崎闇齋と同ふし、歿年を山鹿素行と共にす。熊山蕃山の生る、ド・ラクルに一年を後る、死するは五年の後にあり。ド・ラクルは十七世紀の和蘭經濟學史の上に燦然たる光輝を放つものとして西洋經濟學史の書之を揚ぐると雖も其論說の内容を貝原益軒、新井白石、陶山鈍翁、室鳩巢、荻生徂徠、蔭山元質、太宰春臺等の經濟說と比較するときには未だ其何れを揚げ何れを貶す可きや容易に斷言し能はざるなり。

(二)

我徳川時代以前即ち十六世紀に於ける歐洲の經濟學說の一々に就ては伊太利に於て西班牙に於て英國に於て佛國に於て稍々見る可きものなきに非ずと雖も、之を一科の學問として見るときは其發達は未だ甚だ幼稚なるを免れず。佛國經濟學

の模範全書たる、ギョーマン叢書は實に十八世紀のヴァグアーン等を以て始まるに過ぎず、是れ其以前収録に値す可き重要な單行經濟學書なきことを證する所以なり。伊太利は尤も早く發達したりと雖も猶ほクストヂの伊國經濟學全集の劈頭に置かれたるものは我天正八年即ち西曆千五百八十年を以て生まれたるアントニオ・セラならずや。西班牙經濟學の泰斗たるウスタリフ及ウロアの兩人は遙かに後の人なり。經濟學研究英國に於て吾人が最も早く經濟學上に卓出したる人と認めざるを得ざる(和蘭のウセリックスに勝れる)トーマス・マンは我元龜二年西曆千五百七十一年を以て生まれたるに過ぎず。マン以前の經濟論として吾人はトーマス・モリア・ヒュー・ラチマー・ウホリアム・スタッフ・オードなりと稱せらるゝ失名の某氏、サロウ・オルター・ラレー哲學者ベリコン等の書に散見する所のものを有するに過ぎず。其經濟論ありて其人重きを成すに非ずして寧ろ其人重きが故に其經濟論を拾綴し來るものなり。我邦學者に就て。されば英國の經濟學史はトーマス・マンを以て其第一頁を始むると云ふも差支なし。マンの傑作たる England's treasure by foreign trade は彼の死後十七世紀の後半に至り漸く刊行せられたるに過ぎず。此書

の底本たりしならんと信せらるゝ東印度會社の英國議會に提出したる請願マンの執筆に係ることは疑なきものゝ如しは千六百二十八年のものなれば是れ又た十七世紀に屬せり。此年は我寛永五年に方り羅山藤樹の盛時たり。本佐錄治國大概が正信の自著にせよ。惺窩の代筆にせよ其編述は慶長年間であれば時代に於て少しくマンに先つものなる可し。更に和蘭に就て見ればウセリックスは恰もマンの同時代なりと雖もドラ・クールに至りては著しく之に後るゝものなるを知る可し。然り而して英國に於てマンを生じ和蘭に於てウセリックス並にドラ・クールを産したる時勢は我邦には全然存在せざりしことを忘る可からず。若し英國並に和蘭をして國を鎖して海外に念を絶つこと我邦の如くならしめばマンもウセリックスも亦ドラ・クールも決して起ることなく依然としてヒュー・ラチマー若くはボックスホルン一流の經濟說の程度に止りたるなる可し。經濟學は元より其初めは國內の經濟生活の問題に就て起りたりと雖も學問的體系を具備し獨立の研究範圍を占むるに至れるは決して内國生活の事實に就てにあらず。殆んど悉く皆對外經濟關係に就てなり。即ち先づ和蘭次で英國が海外に國權を張り他の領土を侵略し殖民地を樹て貿易の

利益を壟斷す可く始めたるとき初めて稍々體を成したる經濟論は「メルカンチリズム」の形に於て起れり。就中尤も大なる刺戟を經濟思想發達の上に與へたるものは東西印度貿易及之に關連する Privatizing (Rheterei) にして此の往時の舊帝國主義に假りを實現す可く新たに産れ出でたる特殊の企業形態は尤も多くの經濟論を喚起したり。特殊の形態とは他なし株式會社是れなり。更らに具體的に云へば最初の株式會社たる東西印度會社即ち是なり。『株式會社研究』を見よ。猶和蘭の東印度會社は此とは疑を容る餘地なきに、近來花岡敏夫氏は予が右所の文章を熟讀せず英國東印度會社に非ずとして、一二の雜誌に同一文を寄せて切りに論議を難ぜられ、又た松崎壽氏は予を以て英國東印度會社の設立を千六百十三年なりとすの誤謬に陥りたるもの、如く記されたり。是れ又た拙文を熟讀せざるものなり、英國東印度會社の會社として設立は千六百十年なり、是れ又た商業史の教科書猶克くこれを記す予豈に此事を無視し若くは誤るものならずや、記せよ千六百十年に設立せられたる英國東印度會社は Registered company なり千六百十年に東印度會社千六百十三年英國東印度會社の設立に在り、(續研究五四七頁)と明記せり、予はなる兩學士共に拙文を讀誤せられたるは尚花岡氏の英國銀行に關する疑は松崎氏既に英子に代つて解かれたり。好意多謝。詳しくは株式會社の起源なる拙文を待て見られたし。英國の東印度會社は英國をして現に尙ほ保有する大領土たる印度を確實に獲得せしむるに與て最有力なる機關たりしと共に、他方に於ては經濟學の研究に最も強

き刺戟を與へたる大恩人なり。英國の東印度會社の繁榮は英大帝國の繁榮と英國經濟學の優勝とを意味し、和蘭東印度會社の衰微は英大帝國の繁榮と英國經濟學の消滅とを意味し、和蘭國權の縮少と和蘭經濟學の不振とを意味するなり。英國經濟學中興の祖正統學派の殿將ジョン・スチュアート・ミルは其父ジェームスと共に India Office と密接の關係を有し、殊に父ミルは印度史の著を以て尤も著聞すること必ずしも偶然の奇縁にはあらず。マルサスも亦印度官吏養成の而して和蘭東印度會社は漸次衰微に陥りナポレオンの時全地球上僅かに一基の和蘭國旗を其長崎出島の「コントロール」に樹て得たるを誇るに止り、我邦は又た國を鎖すこと前後二百數十年、此の衰運に陥りたる和蘭東印度會社を通じて僅かに海外と一縷の接觸を繋ぎたる事實は之を忘却し去る可く餘りに重大なり。假りに同じく交通するに和蘭會社によらずして英國東印度會社によりたりとせよ、我邦の經濟學說が受けたる可き影響は如何なりしならんか。是れ聊か趣味ある問題たる可きなり。元より直接の影響は僅少若くは絶無なりしならん、唯だ間接に我經濟生活の中より起る自發的發展が受く可き影響は尠少ならざりしならんか。我邦は交る相手として這

箇の Schattendasein を有する和蘭會社あるのみ、其の和蘭にだも若かざる況んや國權の外振に刺戟せられつゝありし英國に及ばざる遠き固より當然のみ。乃ち我邦にウセリンクスなくピーター・ドラクールなく、トーマスマンなく、從て後にヒュームなく、アダム・スミスを見ざるもの必ずしも我邦學者の劣れる證となす可からず。我邦の『メルカンチル・システム』は侵略的ならずして、退守的なり、殖民地を獲得し領土を擴張して大經濟範圍を立つるによりて鎖封經濟の實をあげんとするものにあらず、却て小經濟範圍を固守して其儘に鎖封經濟の最も完全なる實行を能くしたるものなり。されば『バランス・オブ・トレード』の論の起らざる金銀過重の說を聞かざる當然と云ふ可し。海外通商殖民地の獲得が經濟學の發達と甚だ深き關係を有する、こと並に其經營の爲めに株式會社なる企業形態が發生し、最初の重要な經濟學說殊に『メルカンチリズム』の名の下に一括せらるゝ經濟學說は専ら這箇株式會社就中東印度會社及之に類する海外通商特許會社を或は攻撃し或は辯護する爲めに起りたるものなることは、所謂經濟學史の教科書之を敘述せざるの故を以て予の此主張は必ず反對說に遭遇するならん。遮莫予は今日までに學び得たる所

を綜合して右の如く確信せざるを得ざるものなり。猶詳しくは拙文『株式會社の新井白石が該博なる西洋知識は實に和蘭東印度會社の媒介によりて接受したるものにして、和蘭會社に代ふるに英國會社を以てしたりとせば其後世に於ける決して同じからずして維新の前後イリス、ウェーランド等の經濟書に接したるとき又た著しく異りたる感想を以てしたるやも未だ知る可らず。乃ち十七・十八兩世紀に於ける蘭和經濟學說を知ることとは單に西洋經濟學史の問題としてのみならず亦以て日本經濟學說史の研究の上にも多少の興味なきにあらず。徳川時代の經濟學說一氏著『日本經濟學說の要領』吉川弘文館發兌あり往きて見る可し。但し予は徳川時代の經濟學說を一貫して之を封建制度にのみ關連せしむるに異存あり。徳川時代の經濟學說獨特の發達を見たる一種の『メルカンチリズム』即ち國家自足經濟の最も完全したる時代と照應して見て始めて其眞意を捉へ得可きものなりと信ず。白石祖徠の經濟學說より青陵の說に至るまで何れも這箇鎖封的國家經濟の產物たりざるは希望す。讀者瀧木氏と予と同說を執るものと看做す勿らんことを希望す。

(三)

和蘭經濟學史は其國權の伸張時代たる十七世紀を以て始り衰微の時期たる十八世紀の末年千七百八を以て終る。前後二百年間恰も我徳川氏鎖國時代に方り我邦の海外關係を彼國が獨占したる時期に屬せり。和蘭の先に世界商權を掌握したる

もの前に伊太利あり後に西班牙、葡萄牙あり、此等皆和蘭の勃興の爲めに掩はれ海外に於ける優勢を奪はれ、國內の發達又た已めり。我邦の始めて歐洲人と通ずる葡萄牙及西班牙人に限られたるは彼等が世界商權壇場の優者たりしが故にして、而して和蘭人後に來りて西、葡人を逐ひ鎖國の國是定りて後は我貿易を獨占するに至れるは如何に和蘭國勢の優勝を占めたりしやを想見せしむるものあり。和蘭經濟學亦實に此時に起れり。然れども英國の學者は經濟上に於ては常に和蘭を羨望しウオーター・ラレー、トーマス・カルペラー、ジョサイア・チャイルド、ウヰリアム・テムプル等は之を和蘭崇拜學者と稱するも不可なきほど、和蘭の經濟上の優勢を仰ぎ英國をして之に倣ふて及ばざるを是れ虞れしむるに銳意したる事實と考へ合はずときは、此繁榮時代の和蘭經濟學說は英國に比して寧ろ遙かに遜色ありと云はざる可からず。却て和蘭が衰運に近づきたる十八世紀の中葉に於て起れる經濟論の勝れるものありて『經濟生活の繁昌と經濟學說の發達とは逆行す』との戯言の當れるにあらざるかを思はしむるが如し。和蘭の繁昌を羨望しつゝありたる英國に經濟上の卓見多くして羨望せられつゝありたる時代の和蘭に之を見ること少し

とせば、經濟學者たると同時に忠良の愛國者たるものは寧ろ經濟學說の繁昌なるものを呪はざる可からざるが如し。夫れ然り豈に夫れ然らんや。其繁榮せりと云はるゝ經濟論なるものは概ね政策上の施設論なり。元より眞正の學問は必ず此階段を經過せざる可からざるや論なしと雖も、政策論議の繁きを見て直ちに學問の隆盛を想像するは誤なり。其繁昌せる政策論の中より一科の學問を産み出すことによりて始めて學說の發展を談す可し。然ること能はざるに於ては政策上の著作如何に繁昌すとも其は學說の發展を示すものと見做す可からず。英國が世界の經濟學に誇り得る所のものは和蘭を羨み佛蘭西を倣ひつゝありたる時代に頻出せる政策論の中よりヒュームを出し、アダム・スミスを生じたる一事に在り。此意味に於て和蘭の世界經濟學に對する貢獻を觀察するにあらずんば却て學問の發達を呪はざる可からざるに至らん。然り而して經濟學は十六世紀に至るまで全然基督教神學の爲めに壓倒せられ、學問上にも門閥主義の強く行はれたる當時に於て、學者が特に經濟學の爲に多くの力を注ぐことなかりしは怪むに足らず。唯だ哲學ありて基督教神學以外に經濟學を保育したりと雖も、和蘭は、カルテシウス及スピノサ

を起したるに拘らず、其當時に於ても決して哲學の國に非ず、カス兩氏共に外國人なり。カ氏は佛人、ス氏は葡葡牙人。從て經濟學は當時の和蘭に於て哲學てふ媒姆の慈愛に浴すること能はず。茲に於て經濟論は専ら時務の論策の間に行はれたり。若し數を重視するときは政策上の經濟論は和蘭に於ても決して英國に遜らず、又た佛國にも劣らざるものあるなり。さて今此時代に於ける經濟論を其性質に從て假りに分類するときは

(一)政治學者の經濟說

(二)法律學者の經濟說

(三)學究的經濟說

(四)貿易論者の經濟說

(五)實際問題論者の經濟說

の五種あることを見る可し。此中に教會法學者並に神學者の經濟說若干あり、又た多少哲學的思索を含める經濟說なきにしもあらず、と雖も別に一類を建つるほど重要ならず。

(一)政治學者の經濟說

此類に屬するものは、ヴゴ・グロ・チ・ウスを始めとし、アル・デン・バル・ネ・フェ・ルド、デ・ウ・キ・ット、チ・ル・グ・ラ・ス・ヴ・ホ・ン・ケ・ル、マル・ク・ス・ツ・エ・リ・ウス、ホ・ッ・ク・ス・ホ・ル・ン、スピ・ノ・ザ等に於て而して最も卓越したるものは前にも云へるピ・ー・ター・ド・ラ・ク・ールなりとす。グ・ロ・ー・チ・ウスは國際法學者として人の知らざる所なく、スピ・ノ・ザは哲學者として後世の欽仰する所なりと雖も、其政治學說中に散見する經濟論に至りてはグ・ロ・ー・チ・ウスはト・ー・マ・ス・マンに及ばず、スピ・ノ・ザはジ・ョ・ン・ロ・ッ・クに勝るものあらず。グ・ロ・ー・チ・ウスの經濟論を窺ふ可きものは其 *Parallelon rerum publicarum, liber tertius, de moribus ingenioque populosum Atheniensium Romanorum Batavorum* と稱する書あり、千六百年より千六百二年に至る間の編述に係るものにして、其刊行は遙かに後れ、千八百一年にあり。實に、グ・リ・氏・十七・八・歳の時執筆する所なり。次では *Mare liberum, sive de jure, quod Batavis competit ad Indicana Commercia dissertatio* と稱する千六百九年刊行の書あり、其一代の大著述 *Libri tres de jure belli ac pacis* は千六百二十五年の刊行にかゝり、又た *Inleiding tot de hollandische rechtsgeleerdheyt* は千六百三十一年に出でたり。

フルテンバルネフェルド並にデ・ウキットは共に王佐の才にして一生著述する所少く唯だ其政治上の施設に就て其懷抱する所の經濟說を窺ふ可きのみ。此點に於ては我本多佐渡守と尤も克く對照し得可く殊に大政治家デ・ウキットの *Memoires* は其實彼自ら下筆したる所は其中僅かに二章に過ぎず爾余の部分は悉くド・ラックールの筆に成ると云ふ。恰も本佐錄が正信の意を述ぶる爲め慍窟が下筆したるものなりと云はるゝに似たり。

デルクグラスヰンケルの著にして尤も多く經濟論を載せたるものは *Aenmerckingen ende Betrachtungen of de Placcaten eit, over't Stuck van Kooren en Greyen* 1651なり此書は題名の示めす如く穀物政策を論ずるものにして凶年を除くの外は其輸出を全然自由ならしむ可しとの卓見を述べたるものなり。彼は又た利息制限問題に付ても自由なる思想を有し其政治上の主義の専制主義なるとは殆んど別人の觀あるなり。理論の問題として彼は所有權の尊重を主張し其經濟上の必要を論ずる詳なり。此他グラスヰンケルには其政治學說を載せたる *De jure majestatis* 1643なる大著述あり。

ボックスホインの著 *Institutionum seu disquisitionum politicarum Libro duo* 1650, *Disquisitiones politicae id est sexaginta casus ex omni historia selecti* 1650, *Commentariolus de statu foederatarum provinciarum Belgii* 1650の三書は學問的體系を備へたる一代の傑作にして彼の經濟說を窺ふに足るものあり。大哲學者スピノサの經濟論は其政治書たる *Tractatus theologico-politicus* 1670と *Tractatus politicus* と稱する遺稿死後千六百七十七年刊行との二書に付て見る可し。

ド・ラックールに付ては後段論述す可し。

(一) 法律學者の經濟說

アーノルド・フキニウスに *Institutionum commentarius* 1635 あり、ゲルハルト・ノードに *De foenere et usuris libri III* 1675 (?) あり、コハネス・フエチッスに *Commentarius ad Pandectas* 1698, *Compendium juris extra seriem gaudectarum* 1698, (?) あり、國際法史に有名なるビンカーシヨックに *Quaestiones juris publici* 1781, *Dominum maris* 1700 あり、ウルリックス・フーバーに *Praelectiones juris Romani* 1678, *Digressiones Justinanae* 1678, *Libri tres de jure civitatis* 1672 あり、最後の書尤も多く經濟論を載せたり。

(三)學究的經濟學說

とは懸賞論文、卒業論文の題目として主として法學得業生の試稿せる經濟論篇に顯はるゝものを云ふ即ち Wylngaerden, De Vectigalibus 1674; Tulleken, Utrum monopolia utilia sint, 1741; D.v. Goens, De monopolis 1743; Emants, De munis, reterum, 1754; C.H. Bihon, De mercatura in prunis Batavorum, 1766; J. Bruistens, De libertate commerciorum, 1770; H. O. Cras, De promovenda mercatura, 1771; Wassenaer, De Colonia, 1773; Poelmann, De jure monopoliorum, 1782; Graaf, De prudentia civili in ordinandis tributis, 1785等として多くは十八世紀に屬し書名の示めす如く特權獨占貿易、貨幣、殖民地に就ての問題に關するものなり。

(四)貿易論者の經濟學說

はウセリックス之が巨擘たりと雖も其大多數は十八世紀に屬す。其主なるもの前にリカルド、ル・モア、ド・レスピン、ル・ロンあり、後にルザツク Rykdom Hollands 1778、ステル Fundamenta jurisprudentiae naturalis 1773; Commentarii de Republica Batava 1782 あり、兩人共にアダム・スミスの同代たり。

(五)實際問題論者の經濟學說

は(四)と密接に關連するものにして多くは小冊子小論文の類に於て當時の時事問題を論ずる上に於て一種の經濟思想を開展するものなり。其多くは『ピブリアテカ』、
シカニアナ』に收載せらる、
後段を
看よ。

以上學者の名と書名とを擧ぐる多しと雖も予は殆んど其一をも讀む能はざるものなれば之に就て詳細の記述を試むること能はず。又た爾かすることは徒らに煩雜を加ふるのみにして讀者の迷惑とする所なる可し。されば以下經濟思想發達の大體を概括して之を當時の經濟狀態と關連せしめて簡單なる敘述論評を下さんとするに方り、念の爲め典據の一二を示し置かんとす。

和蘭經濟學はピリアン先生之を大成したりと云ふ不可なし。其書幸にして英譯あり。而して和蘭經濟學史の書には

J. A. Molster, Geschiednis der Staathuishoudkunde van de vroegste tyden tot hedem. Amsterdam. 1851.

De Rooy, Geschiednis der Staathuishoudkunde. 1857.

Van Rees, Verhandeling over de Verdiensten van Gisbert Karei van Hogendorp.

Utrecht 1854.

Van Rees, Verhandeling over de Aanwysing der politieke Gronden en maximen van Pieter de la Court. Utrecht 1851.

あり。レースの書尤も勝り殊に最後にあげたるものは和蘭第一の經濟學者ド・ラック
ールに關し尤も據る可き研究を載せたり。モルスターの書はド・ラックの書はド・ラックの
言をも載せざるほど不備のものなり。故に予は之を取らず全體に就て却て和蘭學
者の企て及ばざるラスパイレス氏の共和時代和蘭經濟思想史に據れり。此書は公
爵ヤプロノウスキー協會の懸賞問題

Quellenmässige Darstellung der nationalökonomischen Literatur in Holland bis zum
Anfang des XVIII Jahrhunderts.

に應じ千八百六十二年二月十一日第一賞を得たる大論文にして同協會受賞論文
集第十一に收載す。其原名左の如し。

Geschichte der volkswirtschaftlichen Anschauungen der Niederländer und ihrer Literatur
zur Zeit der Republik.

ヲ氏の研究は主として現に海牙の王國圖書館に收藏する篤學の藏書家ドンカン
氏舊藏の Bibliotheca Duncaniana 中の和蘭經濟叢書に就て試みられたるものにして、
此叢書がマカロックの英國經濟書集、グストデの伊太利經濟全書、ギョーマンの重
要經濟學者叢書の如く刊行を見ざるは甚だ遺憾とす可し。和蘭の學者自らさへ殆
んど之を利用せず唯ラスパイレス氏ありて始めて此寶庫を開らきたるが如き學
問昭代の恨事たらずんばあらず。此を以て濰本誠一氏の『日本經濟叢書』刊行
の論文の篇尾には甚だ詳細丁寧なる和蘭經濟文獻總目錄を添へたれば學者の便
を得ること極めて大なりとす。
猶一般に參考す可きものは

Fr. Müller:
Essai d'une Bibliographie Néerlando-russe. Amsterdam. 1859.

Asher,
Bibliographical and historical essay on the Dutch books and pamphlets relating to New-
Netherland and the Dutch West India Company. Amsterdam 1854.

にして經濟史殊に商業史の書としては

De Rooy,

Geschiednis van den nederlandschen Handel. Amsterdam 1856.

Koenen,

Vorlezingen over de geschiednis des nederlandschen Handels. Amsterdam 1853.

De Jonge,

Geschiednis van het nederlandschen Zeewesen.

Koenen,

Voorlezinge over de Geschiednis der Scheepsvaart.

Koenen,

Geschiednis der Joden in Nederland.

等あり。ウセリンクスに關するものは後に掲ぐ。

民族の企業化(上)

阿部 秀助

われ爾曹を遣すは羊を狼の中に入る、が如し、故に蛇の如く智くサト、鶴の如く剛直ハトかれ償
で人に戒心コ、ハせよ蓋し人なんぢらを集議所リタに解し又その會堂にて鞭ツつけられば也この
邑にて人なんぢらを責なば他の邑に逃れよ。
(馬太傳第十章)

彼の性格は彼の運命なり(一)とは、現時獨逸文壇の雄將ヤコブ、リッサー、マーンが其
の處女作を飾れる言にして、げに此語の意義を最も直截に、最も痛切に證明せるも
の中世に於ける猶太民族より甚しきはなかる可し、而して彼等が地上に印したる
放浪的生活は、さながら風に動かさるゝ葦の如きに不拘、然かも破折の患を招かず
して、尙ほ現時金權界の牛耳を握れる所以のものは、其根柢に於て、セム民族の通有
性たる打算的實際的の理解力に歸せざる可からず(二)我等は此點に於て現時、此問